

真横に裂かれた怪獣は、砂塵と化して、その場に崩れ去る。

だが、夕星は砂塵は崩れてゆく怪獣に目もくれようとしなかった。代わりに機体各部のセンサーをアクティブに。機体の全機能とカメラアイを介して、閑散として街中を見渡す。

そして、見つけたのだ。

「……よかった」

ズームインした（エクステンド）の視線の先には、陽真里がいた。両掌を口元に当てて、逃げ遅れた人へ避難を呼び掛けているではないか。

「……ったく、お前が一人で避難すれば良いだろうに。こんな時までクソ真面目なんだな」

何気なしにポケットから携帯を取り出せば、無数の通知が届いていた。

そのほとんどが彼女からのメッセージだ。「今どこにいるの?」「ちゃんと避難してる?」という心配から始まり、最後の方は「早く返信しなさい!」「無視すんな!」と露骨に苛立っているのが伺える。

「はは、無茶言うなよ」

こっちは（エクステンド）に乗って、怪獣と戦っていたのだから。

きつと陽真里は、自分が怪獣に狙われていたことなんて知りもしないだろうし、これからも知らなくていい。

「ふう……」

そこで夕星はようやくと安堵の息を漏らすことができた。

身体を浸すのは心地の良い疲労感だ。自分があの怪獣を倒したという事実を今更ながらに自覚して、ようやくある種のプレッシャーからも解放される。

「とりあえず、一件落着……で良いんだよな?」

携帯にはさらに新着の通知が一件。今度は十悟からメッセージが届いていた。

「下を見てみる……だ?」

小首を傾げながらも、（エクステンド）の視線を足元へと下げれば、一代のバイクがこちらに向かって来ていることに気づく。

そこに跨る白学ランの少年は紛れもない十悟であった。仮にも進学校に通う生徒がノーヘルメットの片手運転で、大手を振るう姿はなかなか奇妙なものだ。

「おーい! ター星ー! 気づいてるかー!」

「マジかよ、お前」

夕星もすぐに（エクステンド）の膝を折り、コックピットを覆う装甲板を押し上げた。

「どうしたんだよ、そのバイク？ まさか、どっかの駐輪場から盗んできたんじゃないか。お前じゃあるまいし、道端に乗り捨てあったやつを借りて来ただけだよ」

いや、それは大して盗んだのと変わらないような……

「つか、バイクじゃ追いつけねえし、危ないから止めろって言ったのはお前じゃなかったか」

「あれ、そうだったかな？ けど、世の中には抜け道つてもんが幾らでもあるからなあ」

十悟はそう言ってニヤリとほくそ笑んだ。

一体、どんな裏技を使って追いついたのだから。この悪友は時にとんでもない事を思いつくから恐ろしいのだ。

「それよりも」と前置きをした十悟は、膝立ち姿勢の〈エクステンド〉を興味深く観察し始める。

「〈エクステンド〉の足元に、こんな飛行機の翼みたいなパーツって付いてたか？ しかも片脚だけってバランスも悪いだろうに」

彼が目をやったのは、〈エクステンド〉の「現実改変能力」よって増設された脚部のブレードだ。

「えっと、そいつは……なんて言えば良いんだろうな」

夕星は少しどう伝えれば良いか迷いながらも、〈エクステンド〉に搭乗した際の一部始終を話すことにした。

自分には何故か機体の操縦方法が、手に取るように理解できたこと。

そんな自分でさえ分からなかった〈エクステンド〉の真の力を、謎のノイズまみれの声が教えてくれたこと。

どれも眉唾には信じ難い話であるが、それにいちいち突っ込んでいてもキリがない。

十悟は相槌を打ちながらに話を聞いてくれた。

「なるほどな……他に気づいたことはあるか？」

「ノイズ塗れの声がなんか難しい専門単語をいろいろ使ってた。ARRAMSだとか、エゴシエーターだとか。あとは……なんつか、あの女の喋り口調をどこかで聞いたことがあるような気がするんだよ。あっちの反応的にも俺の名前を知っているようだったし」

そう言えば、あのノイズまみれの声との通信もいつの間にか途切れていた。

用があるときだけ一方的に語りかけてきて、全てが終わればガチャ切りなんて、なんと薄情なのだろうか。

「聞けば聞くほど分からなくなりそうだな……まあ、とりあえず、その頭の奴を取ろうぜ」

「頭の奴？」

「そのゴツいVRゴーグルみたいな奴だよ」

夕星はそこで、自分がヘッドセットを付けたままであることを気づいた。あまりに自分の顔にフィットするから忘れていたのだ。

ヘッドセットを外せば、陽光が直に瞳へと差し込まれた。あまりの眩しさに瞼を開けては、

閉じてしまう。

そして、ふと自分の瞳を見た十悟が絶句していることに気づいた。

「おい、夕星……その目、ちゃんと見えてんのか!？」

十伍は明らかに取り乱している。

「えっ、ちょっと待って……なんだよ、いきなり」

「いきなりも何もねえだろ。なんだよ、その歯車みたいな目は!？」

歯車みたいな目？

そんな事を言われたって、夕星には自覚がない。見える景色がおかしくなったわけでもなければ、眼球に痛みがあるわけでもないのだ。

ただ、一つ違和感があるとすれば、向こうに暗い光の点があることくらいで、

「なんだ、あの光は?」

不意に何かが右頬を擦過する。

感じたのは僅かな痛みと灼熱感だ。つー、と血を流しながらに夕星は理解する。——あの光の点が、まるでレーザーのように自分の真横を通過したのだと。

「……嘘だろ」

それだけじゃない。

あの光はきつと自分の頭を狙ったものなのであろう。根拠はなくとも、光の飛んできた方から、どうしようもない「敵意」と「殺気」を感じるのだ。

だが、奇しくも光の射線はほんの数ミリ程度、夕星から外れていた。頬を焼かれるだけで済んだのは、それが要因であらう。

「……嘘だろ……嘘だろッ!？」

そして、外れてしまった閃光は自分の頬を穿つよりも先に、前へと立っていた十五の胸を撃ち抜いていた。

「——ッッ!」

もはや夕星には頬の痛み程度、どうでも良くなっていた。

悪友の胸には、まるで赤い大輪が咲いたと見紛うほどの血で濡れていたのだから。